



優勝チーム

住友ダッシュ



興奮の中で幕を閉じた今春のWBCに触発され、今年は例年以上に各チームのソフトボール熱も高まっていたことだろう。一方で我が住友ダッシュはWBC熱に今一つ乗り切れずにいた。昨年は準々決勝にてジャンケンで敗戦。「今年こそは」という意気込みでスタートするも、練習試合では拙攻、与四球・守乱続き。運よく3、4月の辞令で野球経験者が加入するが状況変わらず、4月頭の練習試合で情けないほどの大敗。

然しながら、この大敗が起爆剤となった。平日バッティングセンター練、投手は自宅での投球練習、打順組み替え、練習試合後の居残り練習…。個々人の小さな努力が実を結び、直前の練習試合で徐々に調子が上向きに。最後の最後によくチームとして形になり、一体感が醸成された。

迎えた本番、初戦はINPEX Roughnecks。初回、相手の優れた選球眼・そつのない攻撃に苦しめられ、いきなり3失点。厳しい立ち上がりとなったが、この窮地を救ったのが2番手・佐藤。安定したピッチングで失点を最小限に抑える。打線も佐藤の好投に乗じるがごとく繋がりを見せて逆転勝利。

2回戦はうっかり紅忠兵衛。シーソーゲームの展開となるが、先発・後藤の粘り強いピッチング、集中力を切らさない攻撃により13-5で勝利。打線で光ったのは木村。三振のリスクを厭わず、好球が来るまで2ストライクまで待球。好球必打で初戦、2回戦とも全打席出塁。会社ではリスクマネジメント部に所属するが、試合ではハイリスク・ハイリターン姿勢を体現。

準々決勝はClear Lake United。緊迫した試合展開を打開したのは左口。守備の間をつくりライト越えランニング3ランホームランもあり11-5で勝利。「野球よりボールも大きいし余裕でしょ！」と大口を叩くも、大振りでも打が続いていた経験者赴任組に手本を見せつける。

準決勝は大会屈指の強豪Storms。先制を許し、攻撃も焦りからの拙攻で得点できず0-1で迎えた6回裏、攻撃前には円陣が組まれ、主将・島津から逆方向への低く・強い打球を意識、との指示が飛ぶ。その指示通り、市川、左口、桐畑が連続出塁、ラストバッター福本が執念で転がし同点。最後は島津の、自らの指示とは真逆のレフト越えツーベースが飛び出し逆転。投げては先発・飯島の好投で5-1で勝利し決勝進出。

迎えた決勝の相手は、毎年安定感あるチーム力を誇る強豪Izakaya Wa。破壊力のある打線、ヒットをアウトにする華麗な守備に苦しめられ、6回表を終えた時点で2-4と2点ビハインド。6回裏の前には準決勝同様に円陣が組まれ狙いを確認。島津、飯島が出塁し、東の強襲ヒットで1点差。1週間後には日本帰国の4番福島が意地の同点タイムリー。その後ト部の勝ち越し併殺打で5-4と逆転し、そのまま試合終了。グラウンド、ベンチ、そして駆け付けた応援メンバーが一体と



なって悲願の優勝を達成した。

■メンバー紹介■

ピッチャー: シニア杉井、佐藤の2枚看板に、準決勝で好投した飯島、2回戦先発の後藤、それ以外にも藤、武蔵が控える。2枚看板両名はシニアでありながら無尽蔵のスタミナを誇り、スローピッチが故に打たれても「俺のせいじゃない」と言い放つ強靱なメンタルを併せ持つ。

キャッチャー: 陰の主砲である木村。テニスから本競技にはまったソフトボール女子。当日は誰よりもボールを投げた鉄腕。

ファースト: 元気印のト部。本番2週間前に加入(赴任)した最後のピース。キャッチャー出身ゆえの安定したキャッチングと、推進力ある(自身の中で)走塁を誇る。

セカンド: 誰よりも熱い想いと冷静さを持った東。右方向への打撃でチームの窮地を度々救った不動の3番。その熱さゆえに、息子への英才教育にも余念がない。

サード: 主砲 福島。沈着冷静なオフィスでの姿とは一変、熱い姿勢、堅実な守備、勝負強い打撃でチームを牽引。帰任1週間前の本大会で有終の美を飾る。

ショート: 新戦力の矢野。本番3週間前の肉離れで出場が危ぶまれたが、当日は相変わらずの強肩、シユアな打撃で貢献。来年は更なる覚醒を期待。

レフト: ムードメーカー岩下とシニア市川の両輪。岩下は決勝での補殺(レフトゴロ)はじめ「守備からの住友ダッシュ」を体現、攻撃姿勢をチームに植え付ける。市川は2回戦での好守と迫力ある走塁、準決勝での反撃の狼煙を上げるヒットと、重要局面でのプレーが光った。

レフトセンター: キャプテン島津。国内外からのプレッシャーに、優勝報告ができホッとする。1番への打順変更もあり、大会本番では運動量の限界を超えてしまい、準決勝で両足が攣る。

ライトセンター: 準々決勝勝利の立役者 左口。出張続きだったが、前日マッサージによる万全の準備もあり、ここぞの場面での得意の右打ち、堅実な守備がチームを救った。

ライト/ローバー: キーパーラーの福本。幹部陣からの無茶振りで大会直前に左打ちに変更。ひたむき姿勢で全試合を戦い抜き、準決勝では同点を演出。佐藤(妻)も1、2回戦はテニスで鍛えた打棒でチームに貢献。

DH: 大砲 桐畑。いかつい体躯にもかかわらず戦略的にSサイズユニを身に纏い、相手チームへプレッシャーを掛ける。2番 飯島もメンバー構成に応じDHに入り上位打線の一角を担う。

それ以外にも、チームの鍵である走塁の陰の立役者 藤、加藤、淡々とセカンドもこなす武蔵、声出し番長の村井、監督 山口と息子 将喜も盛り上げ役としてチームを牽引。出張不在となった本田、川原の熱い魂もチームを後押しした。

改めてこの場を借りまして、対戦させて頂きましたチームの皆様、悪天候の中で本大会を滞りなく運営頂いた幹事の皆様に心より御礼申し上げます。有難うございました。(島津、ト部、桐畑)



▲「出張不在となった本田もLINEビデオ通話で優勝の喜びを分かち合う(左上)」